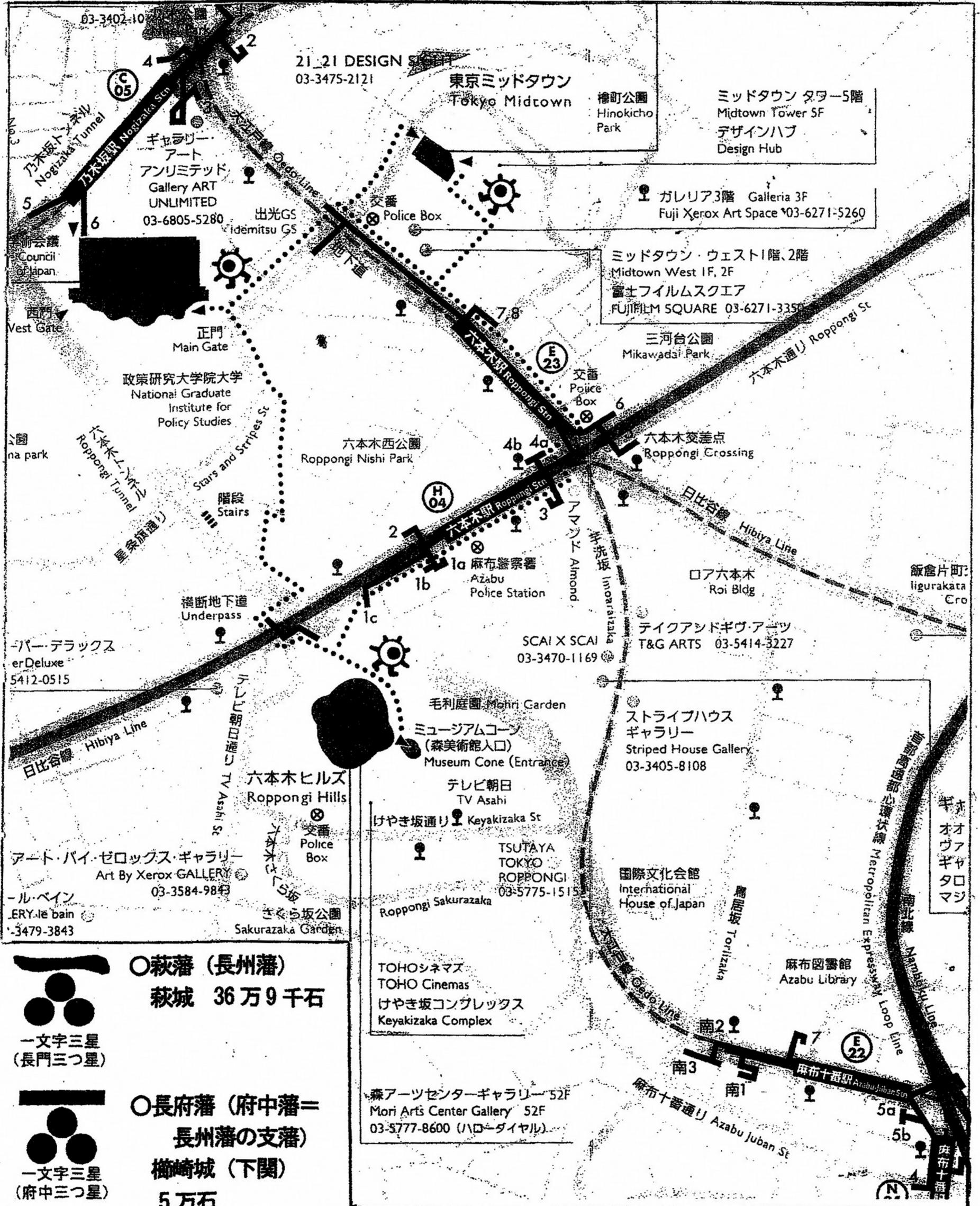
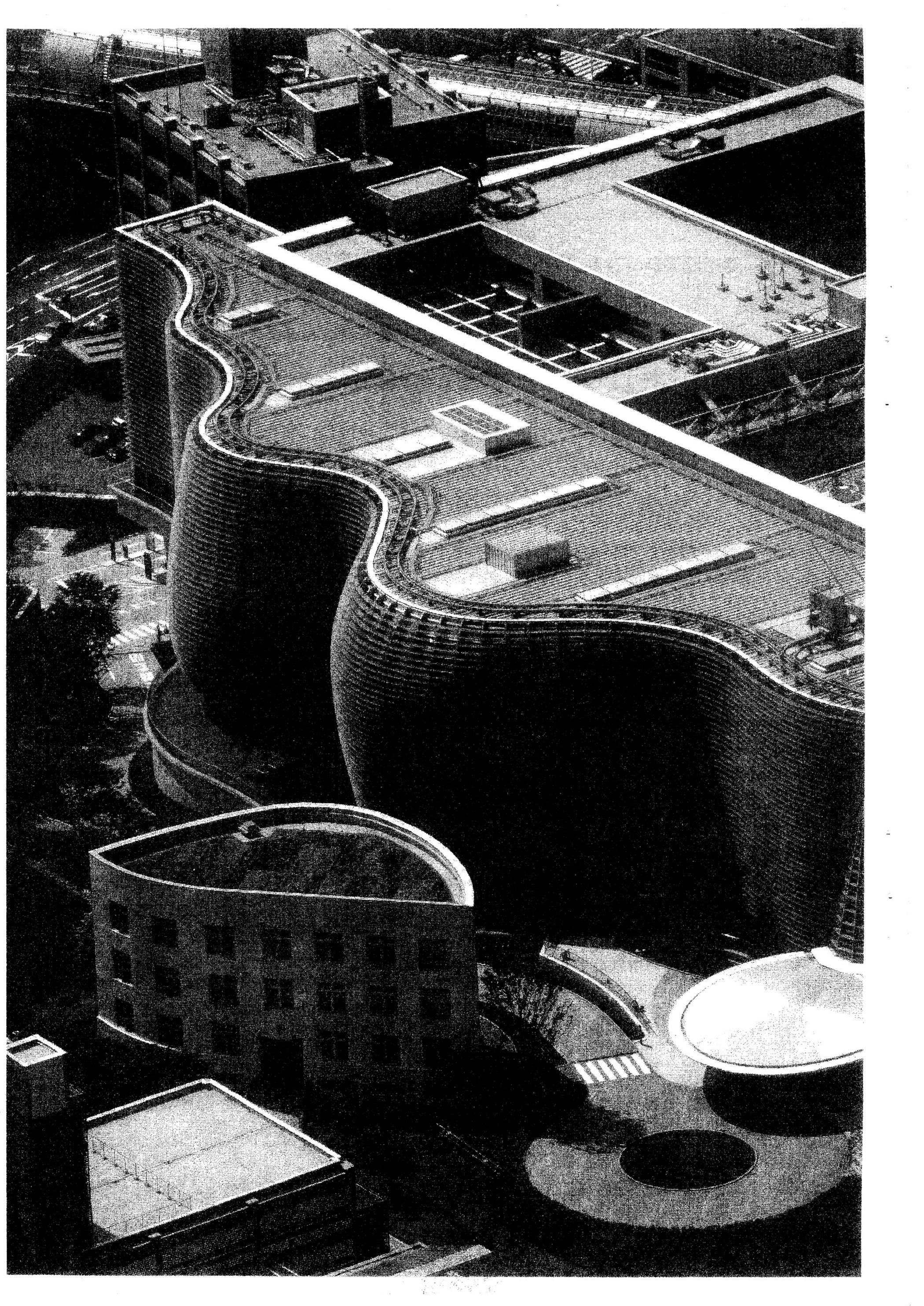


# 六本木！みんなで歩けばこわくない？！

平成20年2月27日＝第376回 史跡めぐり＝NPO 法人越谷市郷土研究会

越谷駅＝北千住駅＝乃木坂駅…国立新美術館…乃木神社…東京ミッドタウン（昼食）…檜町公園…  
六本木ヒルズ…毛利庭園…麻布十番商店街…善福寺…麻布十番駅＝清澄白河駅＝越谷駅





# 国立新美術館

## National Art Center, Tokyo, 2006

国立新美術館プロポーザル 最優秀賞、International Architecture Award 2006

### 〈国立新美術館設計コンセプト〉

国立新美術館は、作品を収集しない新時代の美術館として既に世界の注目を集めている。バーゼル美術館の主催する「21世紀の美術館展」が、現在ドイツで開催されているが、国立新美術館はその中に既に展示されており、シカゴ博物館（The Chicago Athenaeum）は、竣工式を待たずに、国立新美術館を2006年度から設立された国際建築賞を授賞した。

ITとハイビジョンとインターネットの進歩により、今、実物を見る以上の映像をパソコンで楽しむことができる。古い時代の美術品のコレクションは困難である。だからこそ、世界にある美術品を対象に、企画力で企画展示を開催すること、公募展にも美術館を開放することが、新しい方向である。

そのために、国立新美術館は、徹底して機能的な展示・搬出入システムを持っている。他方で、開かれた美術館を追求して、楽しいエントランスホール（アトリウム）を演出している。

国立新美術館は、プロポーザルコンペで提案した内容とほぼ同じデザインで7年をかけてやっと完成した。

設計のコンセプトは、1959年、ほぼ45年前に提唱した「機械の時代から生命の時代へ」という予見に基づいている。メタボリズム（リサイクル）、共生（環境）、中間領域といった生命の原理の集大成である。

この敷地には、陸軍歩兵第3連隊（戦後は、東大生産技術研究所）があった。この建物の保存要望を実現するため、本来、政策科学研究・大学院大学内にあった保存部分をわざわざ換地によって敷地内に取り込み、国立新美術館の予算内で保存した。歴史と現代の共生である。

二番目には、森の中の美術館というコンセプトである。敷地は、青山霊園青山公園と連続する都心の緑地公園に接している。

ファサードは、縦のペアガラスとフィルムを挟んだ水平のガラスルーバーで構成している。更に、ファサードは、水平方向にも、垂直方向にも曲線を持つフラクタル曲線だ。

インテリア（内部）とエクステリア（外部）との境界をより曖昧にして中間領域を創り出そうという工夫である。

更に、このガラスファサードは、森（自然）との共生を実現しつつ、日射熱と紫外線をほぼ100%カットする省エネ設計となっている。



建築家

黒川 紀章

さん

■赤貧：模型の材料にそうめん

くろかわ・きしょう

昭和9年4月8日、名古屋市生まれ。32年に京都大学建築学科卒、39年に東大大学院博士課程修了。日本芸術院会員。最近のものだけでも2004年にイタリアのデダロミノッセ国際大賞、'05年に英国の初代首相の名を冠した「ウォルポール・エクセレンス・メダル」など受賞多数。主な作品に国立民族学博物館（大阪府）、ヴァン・ゴッホ美術館新館（オランダ）など。活動は世界20か国に及ぶ。

埼玉県立近代美術館

Saitama Prefectural Museum of Modern Art, 1982

第24回建築業協会賞

○黒川紀章著作集 主要作品図録 I

黒川紀章著 勉誠出版刊 06.11

日本育英会の奨学金で空腹をしのいだ。一日二食に、そのうち一日一食へと、暮らしは手詰まりになっていった。

昭和三十五年、東京・千駄ヶ谷。玄関に「黒川紀章建築都市設計事務所」と厚手の紙で作った看板をかけた、小さなマンションの自室。当時、二十六歳、東大大学院の学生だった。本人にすれば、一級建築士の資格を取った立派な建築家として独立したはずだった。「大建築家として船出した気分だった」。けれども世の中は甘くなかった。

東大大学院では、東京都庁など数々の名建築を手がけた丹下健三研究室に出入りしていた。研究室といっても、内実は設計事務所。大多数の研究員が徹夜で仕事をこなす状況に疑問を抱き、先輩の建築家、磯崎新らと自身の研究に没頭した。そんな状況だから、研究室では仕事の取り方も学ばなかった。実際、営業には無頓着。自分の事務所の看板も自室の入り口に掲げただけ。表の通りからは見えない。客が来るはずはなかった。



### 「つもり設計」で腕を磨く

この時期の黒川は頬がこけ、見るからにやせ細っている。だが、心に悲壮感はなかった。「頭は夢でいっぱい」だったからだ。腕を磨くためにやったのが「つもり設計」。仕事を受けたつもりで、図面を引くという意味だ。

初めは住宅の設計だった。途中で気付く。どうせ、つもりなんだから、何だっていい。よし、今日は市役所だ。次は県庁だ。ど

らんどん、仕事の規模は大きくなった。

つもりの設計では、模型まで作った。ここで一計を案じる。模型の材料に、そうめんを使ったのだ。模型を作り、壊した後で、そうめんをゆでて食べた。冗談みたいな話だが、実話である。

「昔の模型を出品してくれと言われるが、『食いました』と言うと、みんな変な顔をするよ」

それにしても一日一食の暮らしは、何とかする必要があった。

思いついたのが、コンペ（設計の公募）だった。入賞すれば賞金が出ることもあるし、採用されれば、設計料が手に入る。住宅のコンペでは何度か選ばれた。賞金も出て、一日二食に。海外のコンペにも積極的だった。カナダ・トロントの市役所。世界中、四百―五百人の建築家から案が寄せられ、ファイナル（最終）選考の十数案に選ばれた。日本からは二人だけ。もう一人は高名な前川國男だった。しかし、結局は不採用。賞金もない。「模型代が無駄になった」

### ポンピドー・センターのコンペで賞金

一九七〇年代。ビッグプロジェクトがフランスで進んでいた。パリのポンピドー・センターである。世界から集まった案は二百―三百にもなったという。そのファイナリスト二案の中に入ったのだ。しかし、決まったのは、高名なレンゾ・ピアノとリチャード・ロジャース。ただ、賞金は出た。三食に戻った。

コンペは魅力的だ。「勝ってお金が入ってくる保証はない。しかし、世界中から前川さんや丹下さんのような一流の建築家が作品を出してくる。そこに自分の作品も並ぶ。夢を感じる」

### 提言とボランティアで夢を共有

まず、提言。カザフスタンの首都計画にコンペで優勝したときも、大統領に熱心に説いた。資源や食糧事情を見据えた大陸間を通る鉄道・農業計画である。

そしてボランティア。平成十五年秋、見知らぬ日本人男性が東京・北青山の事務所を訪れた。米中枢同時テロで、一人息子を亡くした父親だった。米政府から補償金が出たという。「(テロ組織の温床となった)アフガニスタンの首都に宿泊研修施設を建てたい」。世界中から集まるボランティアたちの交流施設を作ろうという。意気を感じないわけにはいかない。設計料はもらわな  
い。「その人の夢と共存できるから」。

### 哲学者とみなされた

だが、次の時代を予見した黒川の著作は、ベストセラーになったものも少なくない。四十四年の『ホモ・モーベンス』。「ホモ・サピエンス」をひねり、「移動する人」の意の「モーベンス」をつけた造語だ。ボーダーレス社会を見据えた内容で、これは売れた。

平成十七年四月八日。黒川の七十一回目の誕生日を祝ってドイツで回顧展が始まった。世界の巨匠となった黒川の回顧展をドイツの新聞各紙が報じたが、一紙にこんな文面が躍った。「建築家であり、哲学者である」。ハイデガーやニーチェを生んだ国は、黒川を哲学者とみなしたのだ。哲学があるからこそ本を書き、日本や世界の未来への提言を重ねてきたわけだ。

デビューから半世紀近く。黒川の日常は変わらない。コンペを見つけて果敢に出品。事務所員の給料が遅配しないよう心配の日々。正月も一人、事務所に出て構想を練る。都心の正月は、開いている店が少ないから食事は近くのうどん屋だ。妻の女優、若尾文子も正月、当たり前のように

地下鉄千代田線の乃木坂駅を降りて乃木坂方面出口から出ると、道の向うに時代物の赤煉瓦の倉庫のような建物が見える。これは昔の馬小屋で、乃木邸を探す時の目印。

馬小屋の左手が入口で、今は公開されて公園のように扱われているから誰でもそのまま門をくぐっていい。

まず、外から見えた馬小屋をのぞいてみよう。正しくは廢舎というんだそうで、中には板の床が張ってある。馬は土間に住んでるかと思ったら、さすがに東京の馬は育ちが良いとかオシヤレで板の間に住んでる。

廢舎の所に案内板があつて、ここに住んでた馬のことがあれこれ説明してあるが、僕は馬に名前が付いてたこと自体が珍しくて、なんだかとても遠い時代の話のような気がした。乃木邸の中で一番目につく建物は廢舎だから、乃木さんは自分の馬をよほど可愛がつていたんだらう。

それにしても屋敷の中で馬小屋が一番目立つ家というのは不思議で、とにかく本邸部分がやたら地味に作つてある。木造の平家で、半地下の地下室が付く。

馬が赤煉瓦に住んで、人が木造に住むという感覚は不思議を通りこして異様な気さえしてくる。

「異様」なんて激しい言葉を使ったが、誰が見たって乃木邸の本邸部分は類がない。

あれだけ高名な將軍の家で、作りは西洋館になっていると聞いたのに、実際見てみると、長方形の木の箱に瓦屋根を乗っけただけのシロモノで、明治村にいったいある西洋館みたくにいろんな飾りが付いてはいない。西洋館というからには、玄関口の左右に柱くらい立

つていてほしいし、窓の回りにもバルコニーは無理なら小庇こひさしくらい差し掛けてほしい。屋根の上も、塔はがまんするとして天窓くらい突き上げたって悪くない。

何もここまで地味にしなくったって……

こういう沈んだ気持ちを決定的にしてしまうのはこの建物の色彩。

ふつう西洋館は白いペンキやクリーム色の塗り壁で仕上げるからたいへん明るくて、輝いてみえる。そこが比較的沈んだ色が多い日本の伝統建築の中で西洋館の目立つ所になるわけだが、ところが乃木邸ときたら真黒に塗ってある。

“黒い西洋館”

これじゃ、怪奇ミステリーの題になつてしまう。

僕は、こんな西洋館にお目にかかったことがない。



いったいどうしたんだろう。

一つ考えられるのは、これが乃木さんの好みだったという可能性。

乃木さんの派手嫌いというか地味さ加減はよく知られている。同僚の將軍たちが広い屋敷を構え派手な西洋館を建て、華やかな暮しを楽しんでいるのに反発するように、乃木さんは小さな屋敷に小屋のような家を建てて住んでいた。趣味は無かったが、時間があいた時に精を出したのは農作業で、自邸の一面に畑を作っていたし、那須に出かけて草葺きの民家に住み、荒野を耕して畑を拓いている。

武士の発生は、東国の農民が鋤を刀に持ちかえて自分たちの身を守るようになってから

だと歴史の本は教えてくれるが、乃木さんはなんだかそういう発生期の武士みtainな將軍だった。

そういう性格と好みの人だったから、自邸の建物もただの木の箱を黒く塗っただけで終りにした、と考えられなくもない。

しかし、この説が弱いのは、"それならわざわざ黒く塗ることはないじゃないか、茶色でもいいし、それとも何も塗らなければ自然に地味な木の肌の色になる"という反論がある。うる点で、たしかに、わざわざ黒く塗るとするのは普通ではない。

いったい何故か？

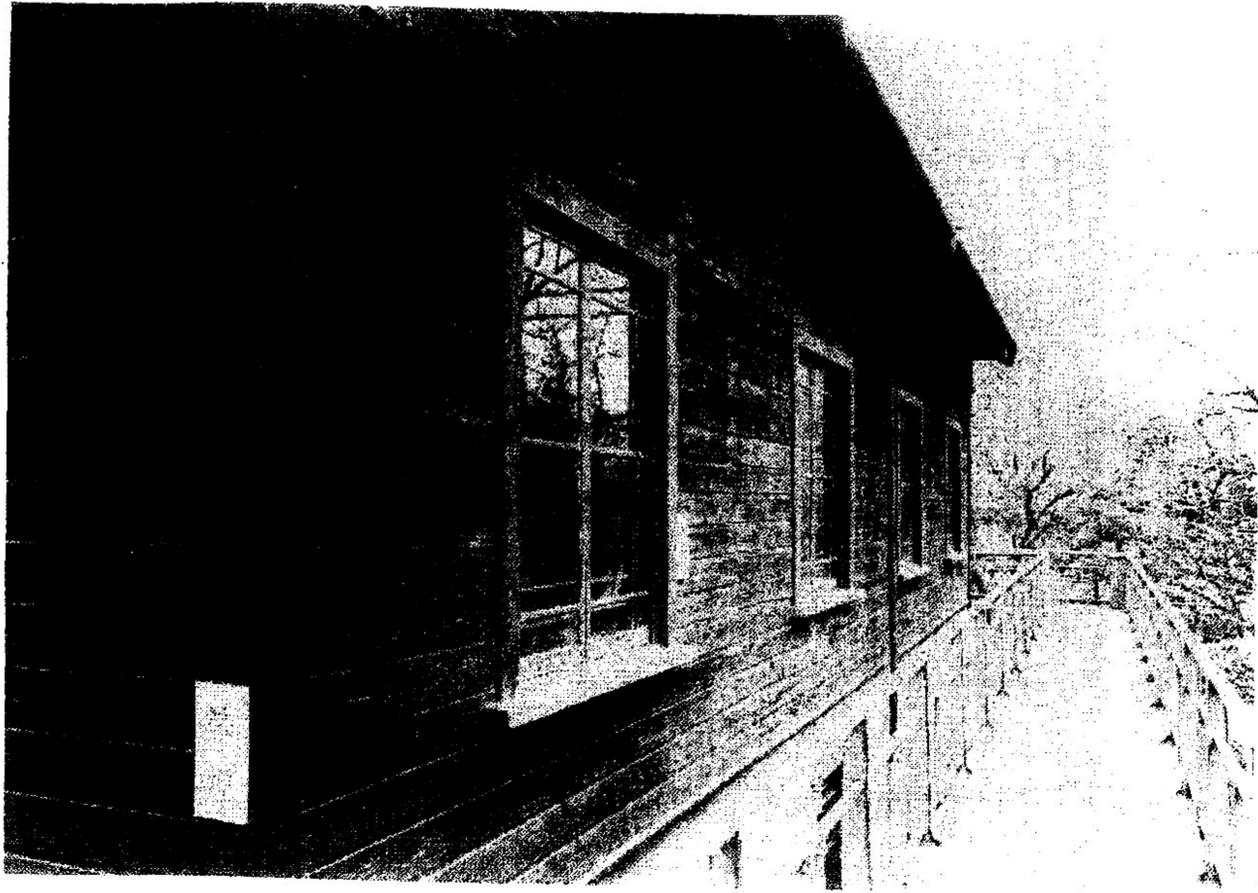
この謎について、今、僕が建築探偵として考えているのは、

へこの西洋館はもしかしたら喪に服しているのかもしれない、ということ。

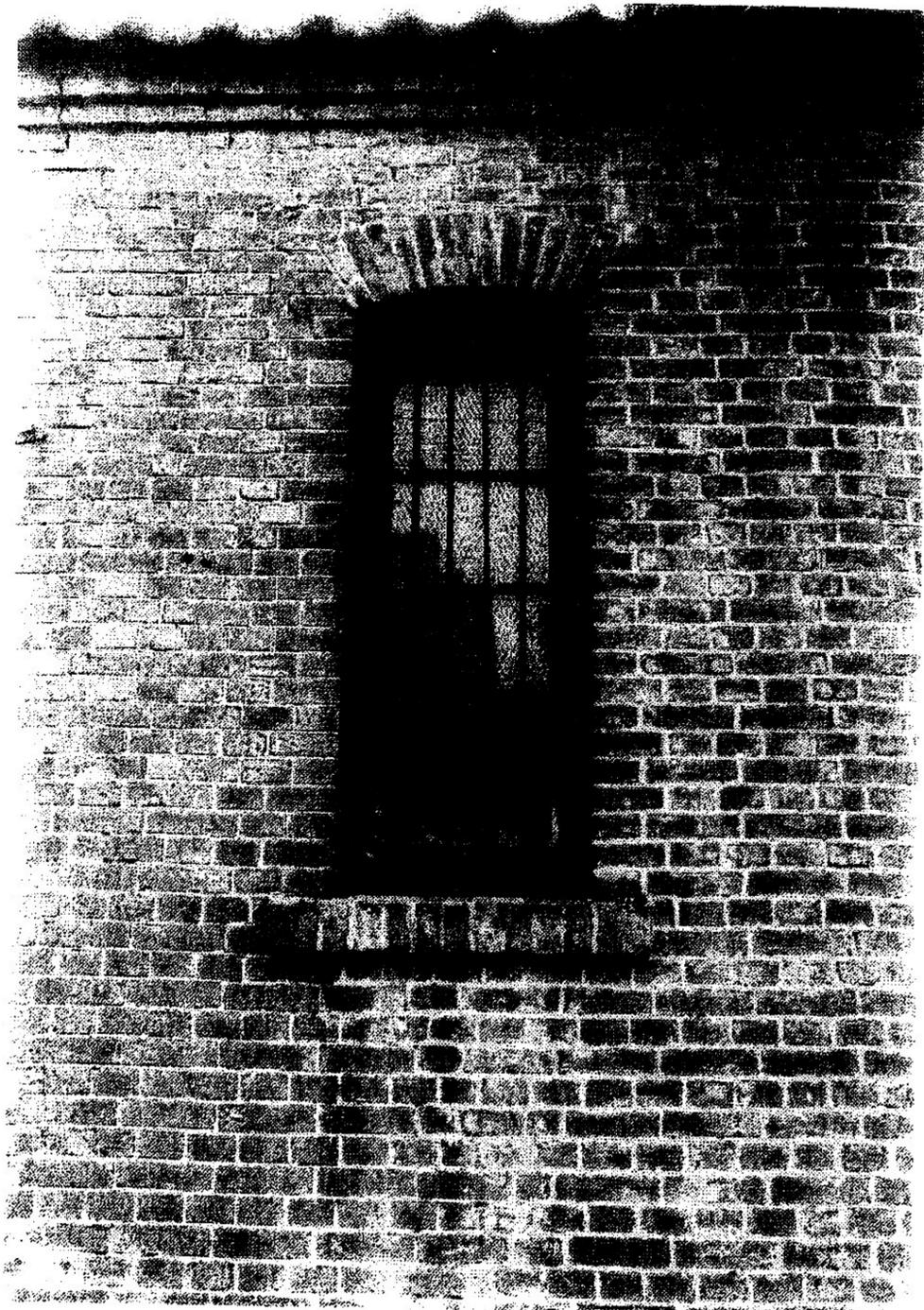
よく知られているように、乃木希典は、明治天皇の葬儀の日の朝、この乃木邸の座敷に端座して妻と共に自ら生命を断ち、明治天皇に殉じている。

家の主がそのまた主に殉じた時、家としてはそれ以後の時間をどのように過ごすかの判断は難しい。家が主のように腹を切るわけにもいかないし、結局思い迷った末、自らを黒く塗って喪に服しつづけることにした。

と考えるはどうだろうか。



- これ以上質素な洋館もないであろう。乃木はドイツ留学をしており、そのせいか外壁の板張りは、イギリスの<sup>したみ</sup>下見ではなく、ドイツの下見になっている。



- 廠舎の赤レンガ壁。東京の大通りに面して残る、今では唯一の明治の赤レンガ建物になってしまった。廠舎というのは、今でいうと車庫に相当する。

一番高名なのは、辻占いをして家計を支える少年に、乃木が大金を与え、感奮して少年が努力を重ね、立身をするという「乃木大将と辻占売少年」の話だが、これは実話だ。乃木は、貧窮者、戦傷者、その遺族には、援助を惜しまなかったし、そういう人物だと民衆からみなされていた。限りなく優しい人物として記憶された。

講談師たちも、乃木を主人公とする噺を沢山作った。

例えば、こういう話だ。田舎の駅に、よれよれの和服を着た老人が降りる。

老人は、駅前の店に行き、何某という家を知らないか、と訊く。

店の婆さんは、「知ってるよ」と云う。

「暮らし向きはどうだろう」

「一人息子が戦死してからは、酷いもんさ、食べるものも食べられないでいるよ」

老人は顔を曇らせ、うなだれる。

「乃木という奴に殺されたんだ、と云って、一度恨み言の一つも云ってやりたい、と毎日ぼやいているさね」

老人は泣き出した。泣いたままとぼとぼと、教えられた家への道を歩いていった……後日老人は乃木將軍だと解るといふ筋立てである。

一句の講演

愛山は語っている。「田舎の演説会などありて希典も其席に列すること」もあつたが、演説を乞われても登壇せず、突つ立って伏し目がちのまま、すでに曇つた声でようやく口にした言葉が「希典は諸君の子弟を殺したり」。あとを続けることかなわず、その「睫には露を宿した」るを見た聴衆は、「恰も強烈なる電気に打たれたる如く、一座肅然として形を改め」、やがてすすり泣きの声が聞こえてきた、と。

この一場は、愛山に少し後れて一二月に出た横山健堂『大将乃木』をはじめ、多くの（乃木伝）が語り継ぐところとなっている。たとえば、かつて乃木と親しく接した服部他助ら学習院教授連の援助のもとに同助教授竹沢義夫が著した『児童修身叢書第一編乃木大将』（昭和二年）は、横山の記述をほぼ踏襲し、「東郷、上村両海将と共に信州人に招かれ」た長野での「戦役講演」でのこととして、次のように一場を描き出している。

大将は如何にすゝめても演壇に登りませんでした。そして肅然として聴衆の前に突立つたまま、「諸君。」

と呼び、

「諸君、私は諸君の兄弟を多く殺した者であります。」

と言つたまま、頭を垂れ、やがてはらくと涙を流し、遂にハンケチを出して顔を掩ひすゝり泣きして次の句を言ふことは出来ませんでした。

講演はこの一句を以て終わりました。一句の講演でも満場を感動させて、一人として泣かぬものはなかつたと申します。

☆乃木希典（1849嘉永2〜1912大正1）長州出身 西南戦争では

薩軍に連隊旗を奪われ、一生の恥辱とした。日露戦争では大将・第三軍司令として旅順要塞攻撃を指揮。白兵突撃を繰り返す拙い攻めにより5万9千人の死者を出す。自身も二児を戦死させ、悲劇の英雄として神格化された。戦後は学習院院長として、華族の子弟を厳しく教育した。明治天皇を追って夫人とともに殉死。赤坂の自邸には乃木神社が創建された。

江戸東京をつくった偉人鉄人 荒俣宏・榎本了吉編 平凡社刊 02・10 参照

▼乃木大将 其令息勝典氏戦死の報を聞くや神色自若平生に異ならず、「豚児能く死せり」といひしのみにて、其後一言も令息若しくは家郷の事に言及したる事無し唯一詩を賦して感懐を表して曰く

山川草木転た荒涼

十里風腥し新戦場

征馬前まず人語らず

金州城外斜陽に立つ

（漢詩原文は白文。書き下しは『詩歌物語』に拠る。以下同様）

乃木希典―予は諸君の子弟を殺したり― 佐々木英昭著 ミネルヴァ書房刊 05・8

「水師營の会見」

佐々木信綱作詞・岡野貞一作曲／文部省唱歌

旅順(りょじゆん)開城(かいじょう) 約成(やくなりて) 敵の將軍 ステツセル 乃木大将と会見の所はいずこ 水師營

庭に一本(ひともと) 桑(なつめ)の木 弾丸(たまご)あとも いちじるく ぐずれ残れる 民屋(みんおく)に 今ぞ相(あい)見る 二將軍

乃木大将は おごそかに、 御(み)めくみ深き 大君(おおきみ)の 大(おお)みことのみ 伝(つと)うれば 彼(かれ)かしこみて 謝(ま)まつる

昨日(きのう)の敵(てき)は 今日(けふ)の友 語ることはも うちとけて 我(われ)はたえつ かの防備(ぼうえい) かれは称(な)えつ わが武勇(ぶゆう)

かたち正して 言い出でぬ 『此の方面の戦圖に 二子(にし)を失(な)い給(たま)いづる 閣下(かくげ)の心如何(いかに)ぞ』と

『二人の我が子それぞれに 死所(しじよ)を得たるを喜(よろこ)べり これぞ武門(ぶもん)の面目(めんぼく)』と 大将答(たえ)力(ちから)あり

両將(りやうしやう)屋敷(いせ)共にして なおもつきせぬ物語(ものがたり) 『我(われ)に愛(あい)する良馬(りやうば)あり 今日(けふ)の記念(きねん)に獻(けん)ずべし』

『厚意(こうい)謝(ま)するに余(あま)りあり 軍(いくさ)のおきてに從(したが)いて 他日(たいつ)我が手(て)に受領(うりやう)せば ながくいたわり養(やしな)わん』

『さらば』と握手(てしよ)ねんごろに 別(わか)れて行(ゆ)くや右(みぎ)左(ひだり) 砲音(たうおん)絶(た)えし砲台(ほうだい)に ひらめき立てり 日の御旗(みはた)

## ○東京ミッドタウン

三井不動産 100%出資の東京ミッドタウン（株）の経営。

建物 総括設計者・日建設計 マスタープランデザイン・SOM（スキッドモア・オーイングス・アンド・メリル・エルエルピー）

この地＝長州（萩）藩・毛利家の下屋敷→明治時代・陸軍駐屯地→歩兵第一連隊本部→戦後・米兵将校宿舎→防衛庁檜町庁舎

ご昼食のヒント（うまい・まずい・ご勘弁～） くわしくは受付で「グルメガイド」を。

## ○地下カジュアルダイニング

- ・江戸切庵 日本そば 1000 円くらい
- ・今井屋茶寮 比内地鶏親子丼 1100 円
- ・デリー ランチカレー 1000 円～
- ・千里馬南翔小籠 ランチ 1000 円～

## ○ガレリア地下

- ・麺 刀削麺 880 円
- ・鈴波 味りん粕漬定食 1029 円
- ・東京ハヤシライス倶楽部  
ハヤシライス 950 円
- ・米処 雷神光 おにぎり 180 円～

## ○プラザ地下

- ・フードコート ランチ 780 円～

<団体行動ですので、時間のかかるコース類は、他日になさってください>

## 檜町公園

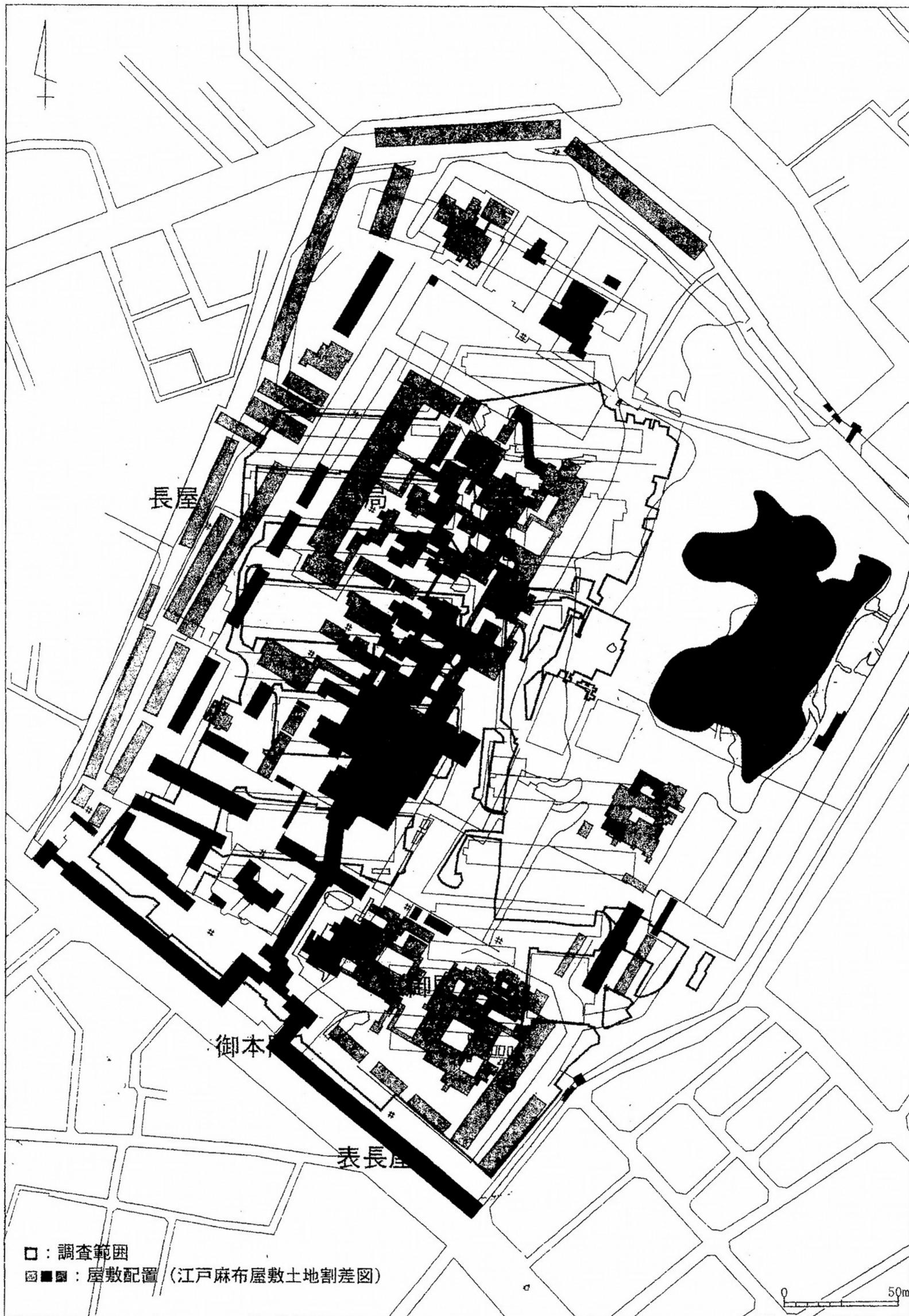
檜町公園付近は、江戸時代長州藩松平大膳大夫（毛利氏）の中屋敷でした。敷地の総面積は約36,800坪（約12ha）ありました。その庭は「清水園」と呼ばれ、当時の名園の一つでした。また、邸内に檜の木立が多かったことから「檜屋敷」と呼ばれていました。かつて檜町と呼ばれたのもこれに由来しています。

明治4年（1871）に国の管理地となり、明治7年（1874）歩兵連隊の駐屯地となり、戦後は一時米軍に接收され、防衛庁の設置ののち、この部分は昭和38年（1963）に都立公園として開園し、昭和40年（1965）都から移管されて区が管理しています。公園には、木立に囲まれて池があり、広場には幼児の遊具や坐像女性の彫刻（ネレイス（海の精）エミリオ・グレコ作）が置かれています。

公園横にある坂が檜坂、近くに防衛庁・防衛施設庁があります。

○インターネット「東京散歩」より





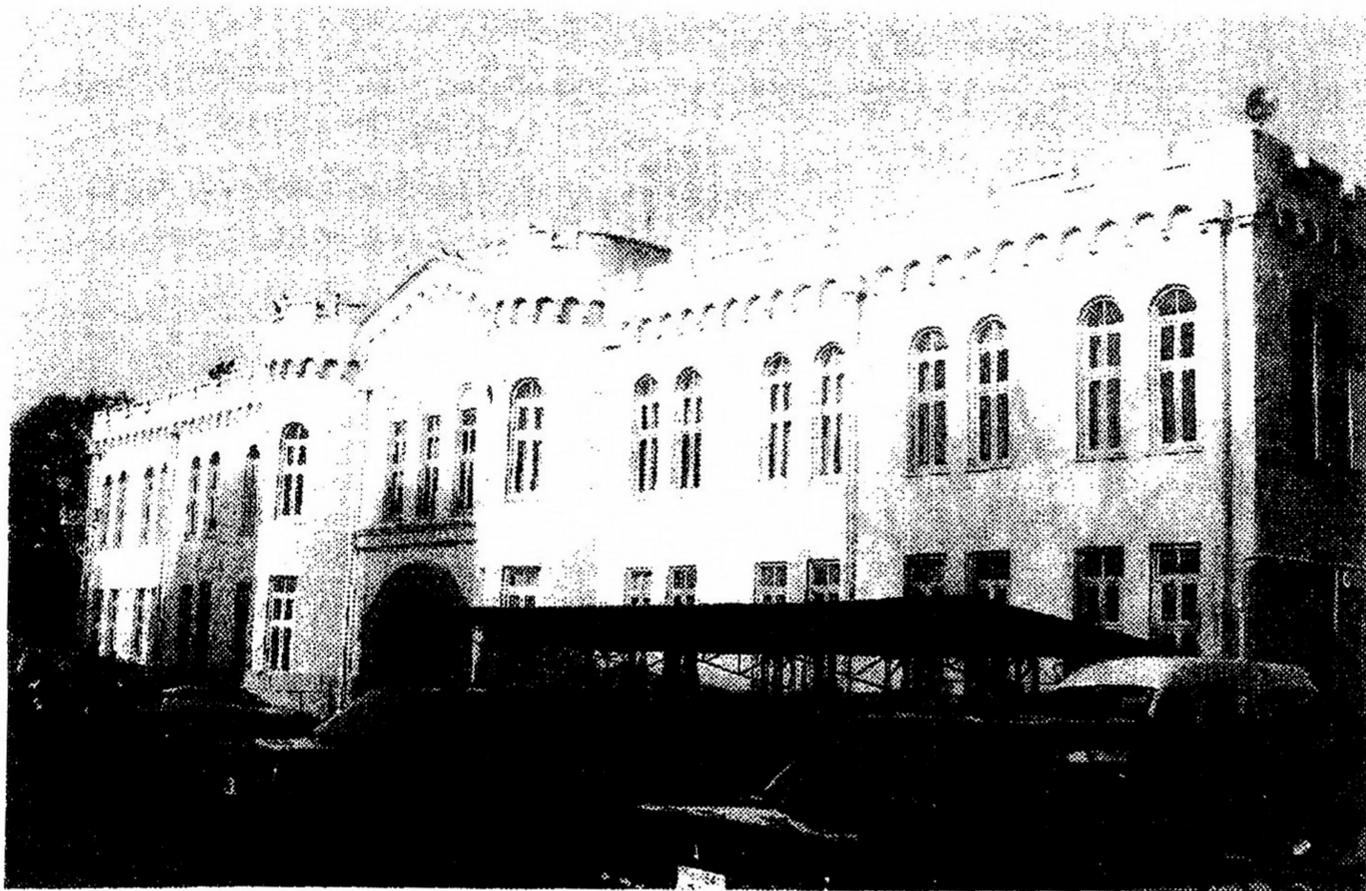
第2図 調査範囲と麻布下屋敷の配置 (1/2000)



○港区萩藩毛利家屋敷跡遺跡 東京都生涯学習文化財団編  
東京都埋蔵文化センター刊 05.3

## 2・26事件の中心部隊

歩兵第一・第三連隊／港区六本木・赤坂



旧歩兵第一連隊本部（現防衛庁20号館）

1936（昭和11）年2月26日早朝。東京は前夜降った大雪で一面の銀世界だった。皇道派青年将校に率いられた約1400人の下士官・兵士が首相官邸をめざす。いわゆる2・26事件である。その中心部隊を構成し、800人をこえる将兵が参加した歩兵第三連隊（通称、麻布三連隊）は、一時連隊廃止案も出たほどである。その連隊本部は1928年に建てられ、全体の形は八角形をしている。現在は、東京大学生産技術・物性研究所として使われている。

第三連隊に次ぐ約460人の参加者を出した歩兵第一連隊本部は、防衛庁内に第20号館として残っている。関東大震災で崩れ、1929年に新しく建てられたものである。鉄筋コンクリート二階建ての白い姿は、洋館を思わせる。旧営門が塀と駐車場の間にひっそりと残っている。また、防衛庁の市ヶ谷移転計画によって、20号館もとり壊しの危機に瀕している。

歩兵第一連隊は、徴兵令に基づいて1873（明治6）年に編制された日本最古の連隊である。その連隊長に乃木希典（二代）、東条英機（二四代）がいる。

<地下鉄日比谷線「六本木」下車、外苑東通りを防衛庁に向かって10分>

# 風格ずしり「侍大将」

世界の超高層ビルを同じ縮尺のイラストレーションで高さ順に一列にならべて見られるインターネットのウェブサイト「スカイスクレイパー・ペー ジ・ドット・コム」には思わぬ発見がある。東京に続々出現する高層ビルの大 半は二〇〇メートル前後でランクは二〇〇位がやっと。だが、基準を「高 さ」から「太さ」に置き換えて眺めれば、六本木ヒルズのオフィス棟「森タ ワー」は優に国際級だ。

五四階、高さ二三八メートルはそれほどでもないが、ワンフロアの面積 五八〇〇平方メートルは東京ではかつてない規模。イラストレーションで もエンパイアステートビルなどにひけをとらず、近い将来も含め東京の高 層ビルの大將格と目される。

米マンハッタンに本拠を置く設計事務所「K P F (コーン・ペダーセン・ フォックス)」による外装デザインは、その位置づけに似つかわしい。いわ く「サムライの甲冑」。凹凸のある外壁を頂部で斜めに切り欠いてあるのは 兜の見立て、数十階分を斜めに切り裂く直線のアクセントは鎧の イメージだろう。まさに仁王立ちする「総大将」の風情だ。

この手の日本趣味を加味したデザインは、以前は日本人の表現 者が海外で現地のひとびとの期待にこたえるのを目的とした。そ れを米国の建築家が手がけるのは、アジアを舞台にした摩天楼市 場のにぎわいを反映している。



「六本木ヒルズ」のシンボル。

# 闇に輝く光のオブジェ

夜の更けたころ、地下鉄を麻布十番の駅で降りて六本木を目指す。斜面を横断する自動車道路にヘッドライトの光が走る。六本木ヒルズまで歩いて五分ほど。美しく巨大な発光体が道路沿いに見え始める。「テレビ朝日」のアトリウム。曲面のガラス壁の長さは一二〇メートル、高さは三〇メートルに達する。その光り輝く姿は眠らない都市、六本木の新しいシンボルだ。

「夜の建築を意識した」と設計の槇文彦氏から聞いた。六本木ヒルズは、高層オフィス棟の展望室が午前一時まで営業するなど、都心居住者のための「文化都心」を標榜する。時差を超え、地球規模でニュースを追う放送メディアの総本山らしく、夜間も建築としてのメッセージを送り続けるべきだと槇氏は考える。それが光のオブジェに結実した。の光明と思える。

六本木ヒルズ開場時の人波が一段落してアトリウムは昼間も真価を發揮し始めた。ガラスの箱に身を置くと端から端まで一二〇メートルがゆったりと見通せるようになった。屋外に目をやれば、美しい金属の格子を透かして日本庭園とその向こうの雑駁な風景が視界に飛び込んでくる。東京の特産物、アンバランスな景観のダイナミズムを堪能できる場が出現した。

本本 6-9-1  
E



しさが

いモダニズムの



⑤⑩ 毛利甲斐守邸

六本木六―九 六本木ヒルズ内

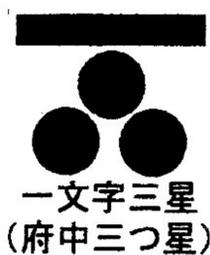
ここは江戸の初め、慶安年間（一六四八―一六五二）に毛利元就の孫秀元が甲斐守となつて、上屋敷をもつて以来、江戸の末まで毛利家の屋敷がありました。

赤穂浪士の仇討成就の後、十人が預けられ、翌年二月四日切腹したところです。岡島八十右衛門三八才、吉田沢右衛門二九才、武林唯七三二才、倉橋伝助三四才、村松喜兵衛六二才、杉野十平次二八才、勝田新左衛門二四才、前原伊助四十才、間新六郎二三才、小野寺幸右衛門二四才、以上で浪士預りの四家中最も待遇が厳しかったと伝えられます。

間新六郎だけは、介錯を潔しとせず真の切腹をして果てたといわれ、その遺体は親戚の者に引き取られ築地本願寺に葬られました。（墓は泉岳寺にもあります。）

都旧跡（昭和18・3・16）

乃木大將は長府藩馬廻役・乃木希次の子として、ここで生まれた。



一文字三星  
(府中三つ星)

# 善福寺

日本で最初にアメリカ公使館が置かれた

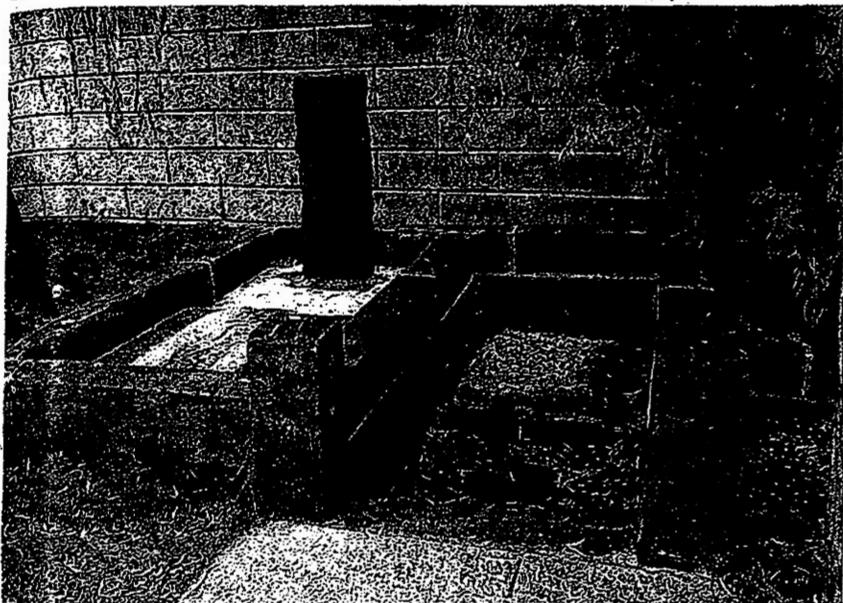
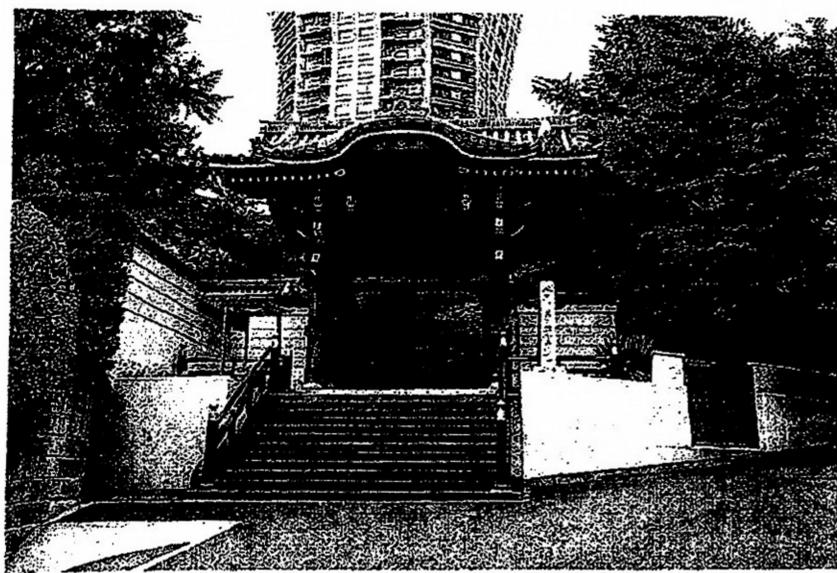
港区元麻布にある麻布山善福寺は、

天長元年（824）創建という大刹。

開山は弘法大師空海で、その霊跡に参道沿いの井戸がある。近辺の水の乏しさを憐れんだ空海が鹿島明神に祈願し、錫杖を突き立てたところ、水が湧き出したというもので、柳の井戸、

または鹿島清水と呼ばれている。

参道をさらに進み、中門の前に立つと、左手に大きく枝葉を広げた銀杏が見える。幹周10・4メートル、樹高約20メートルという巨木だ。推定樹齢750年以上という都内最古の銀杏の木で、国の天然記念物に指定。根や枝の



(上) 近年、地下鉄南北線が開通した麻布十番駅から徒歩5分ほどの距離。麻布十番は善福寺の門前町として開けた町である。(中) 現在も水が湧き出る柳の井戸。(下) ハリスの記念碑。日本最初のアメリカ公使館跡として都の旧跡に指定

張り方から逆さ銀杏と呼ばれている。この木は、善福寺が鎌倉初期に真言宗から浄土真宗へと改宗した寺歴を物語る、親鸞聖人ゆかりの木でもあり、「杖銀杏」の別名がある。改宗の理由は、寛喜元年（1229）、流罪地の越後から京へ戻る途中の親鸞聖人が善福寺を訪れた際、時の住職了海上人がその高德さに深く感銘し、帰依したことによる。その親鸞聖人が寺を去る時、境内に杖を突き立てると、杖から根が生えて芽を吹き、枝葉を伸ばしたというのが、先の「杖銀杏」である。

善福寺は、日米修好通商条約が結ばれた安政5年（1858）の翌年から明治8年（1875）まで初代アメリカ公使館となったことでも名高く、境内にはタウンゼント・ハリス公使の記念碑が立つ。また、当時公使館に頻繁に出入りしていた福沢諭吉夫妻の墓もある。そのほか、鎌倉末期造立の了海上人坐像（都有形）をはじめ、多くの寺宝が残されている。



**温泉** **麻布十番温泉** あざぶじゅうばん おんせん

地下500mから黄褐色31度の重曹泉が湧き、神経痛・冷え性・リウマチなどに効果がある。3階に舞台付き大広間で休憩できる温泉会館、1階に銭湯の越の湯(400円)がある。★温泉会館1260円、11:00~21:00、火曜(祝は翌日)休

**食** **総本家更科堀井** そうほんけ さらしなぼりい

やぶ、砂場と並ぶ江戸前そばの3大老舗の1つが更科。麻布十番には更科を名乗る店が3軒あるが、初代の血筋を引いているのがこの店。真っ白で滑らかな更科粉を使ったそばには、ほのかな甘みがある。さらしなそば730円。★11:30~19:30止、無休(1・8月に休みあり)。

**買** **浪花家総本店** なにわや そうほんてん

昭和50年に大ヒットした「およげ!たいやきくん」のモデルで、たいやきの元祖として知られる店。パリッとした食感と、尻尾まで詰まった餡が魅力のたいやきは1個150円。2階はNaniwaya Cafeとなっている。★11:00~19:00、火曜休。

**買** **豆源本店** まめげんほんてん

江戸時代創業の老舗。店内には50種類以上の豆菓子やおかきがそろっている。高熱の油でカリッと揚げ、サッと塩をふったシンプルな塩おかき90g368円が看板商品。うす塩味の南京豆は200g840円。★11:00~20:00(火曜19:00、金・土曜20:30)、火曜不定休。

**食** **萬力屋** まんりきや

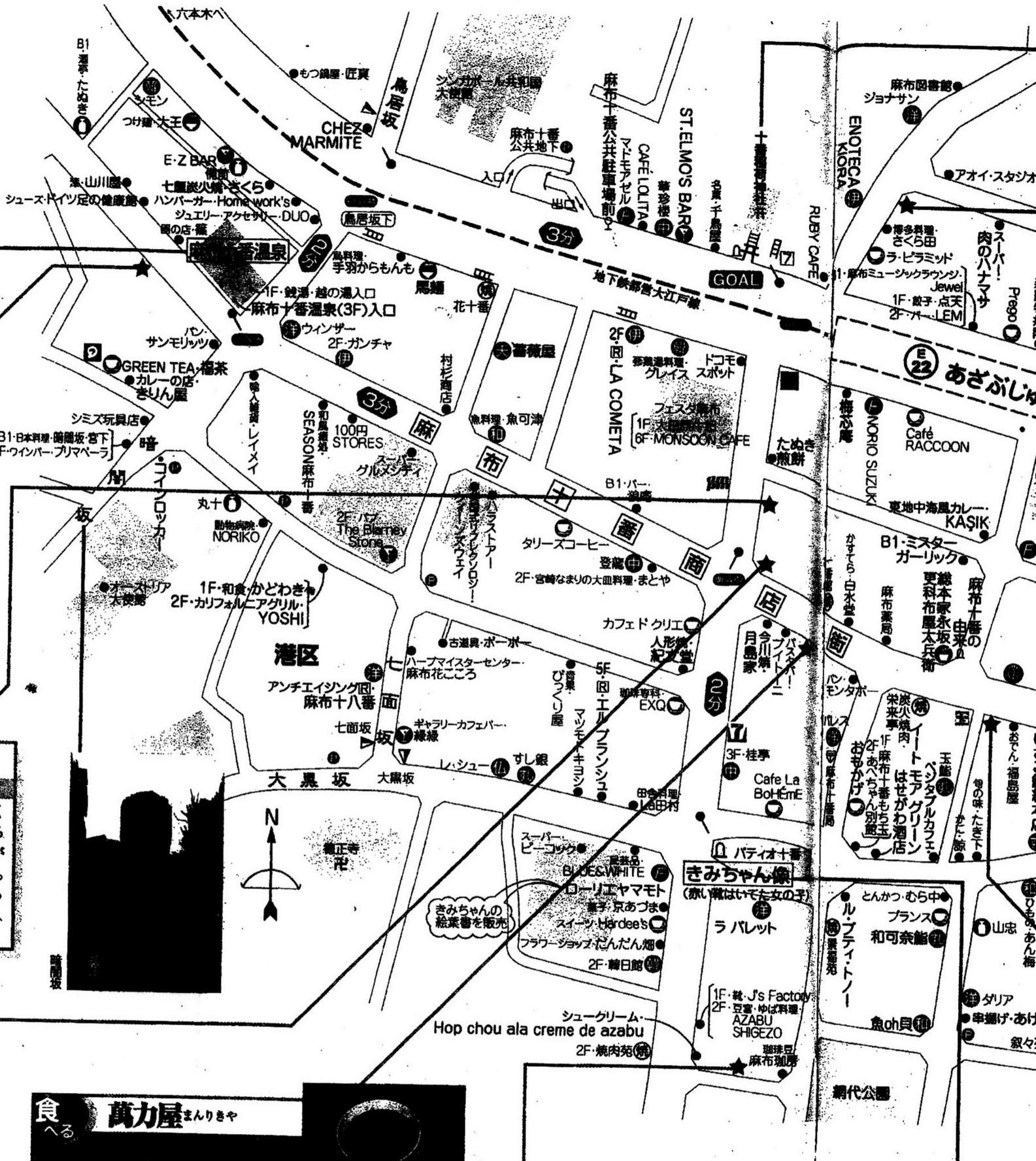
「麺と酒」がテーマのレストランバー。昭和初期をイメージした店内で、ラーメンや一品料理、ウイスキー・カクテル・焼酎などが味わえる。黒ごまたんたんメンが880円、炒めニララーメン840円。カクテルは680円。★11:30~14:00止・17:00~22:00止、無休。

**買** **万華鏡専門店** カレイドスコープ昔館

回すと美しい模様次々と現れる万華鏡の専門店。店内にはさまざまなデザインや材質の万華鏡がところ狭しと並んでいる。万華鏡を実際にのぞかせてもらうこともでき、刻々と変化する美しい世界を満喫できる。★11:30~19:00(日祝11:00~18:00)、無休。

**見** **きみちゃん**

岩崎な眠に建ちゃん宣教たが核を明治坂教生



○東京下町歩く地図帳07 山と溪谷社刊 07.5

○表紙下部地図 六本木アート・トライアングル 国立新美術館・サントリー美術館・森美術館制作  
○藩の紋章等 「防長墓域掃苔録」ホームページから

# 麻布 あさぶ (港区)

阿佐布 (小田原衆所領役帳)、  
麻生 (改撰江戸志、新田系図)

を引用)、浅府 (江戸雀) とも書く。地名の由来説に、麻を多く植えて布を織り出したから麻布 (江戸志)、麻のよく生える地であったから麻生 (江戸砂子)、草の浅々と生える地で元は浅生といった (江戸砂子) 等がある。江戸時代初期から前期の表記は阿佐布村・阿佐布町であった (武蔵田園簿・元禄郷帳)。現行地名にも残る「麻布」表記は、元禄三年 (一六九〇) 頃が早いもので (江戸図鑑綱目)、公的には正徳三年 (一七二三) 頃に書き替えたという (町方書上)。

## 麻布十番 あさぶじゅうばん (港区)

十番の称の起りは、元  
禄十一年 (一六九八)、白

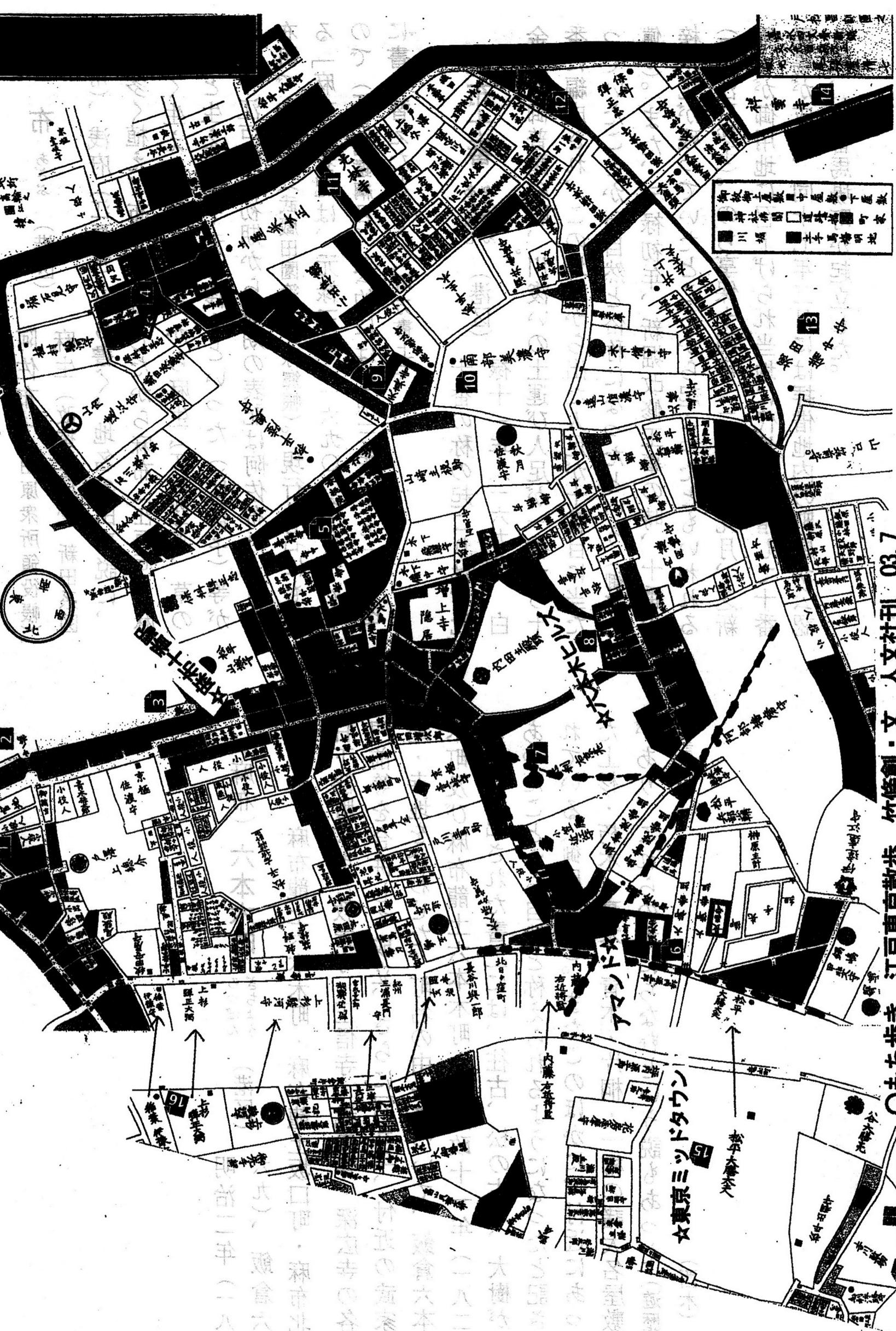
金御殿御普請の際、川浚いの土運び人足が一番から十番に編成され、この地域から出た人足が十番目に当たっていたことから自然と俗称になったという (御府内備考)。また、元禄初年、新堀改修工事の時、十番の榜示杭が残っていたところから起こったともいわれる (再校江戸砂子)。のち享保十四年 (一七二九) 九月、芝新馬場が御用地に召上げられ当地に代地を拝借して十番馬場が成立、同十七年二月には拝借地内の町屋が公認され、十番馬場町が起立した。

## \* (麻布) 六本木町 ろっぽんぎちよう (港区)

明治二年 (一八  
六九)、飯倉六

本木町・麻布龍土六本木町・麻布龍土坂口町・麻布北日下窪町代地と教善寺・正信寺・光専寺・深広寺の各門前等を合併して成立、さらに同五年、付近の武家地・寺地を合わせた。町名の由来について、飯倉六本木町及び麻布龍土六本木町から文政十一年 (一八二八) に提出された書上には、往古、松の古木、大樹があつたことから自然と称えられるようになったと記されている (御府内備考)。またこのほかに、付近にあつた上杉・朽木・高木・青木・片桐・一柳の諸大名屋敷があり、これらの木にちなむという説もあつた (遊歴雑記)。

(西木)



御社御一五敷目十屋敷十下屋敷  
 ■神社佛閣 □道場 ■町家  
 ■川堀 ■土手馬場明地

○もち歩き 江戸東京散歩 竹條創・文 人文社刊 03.7